
step

友

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

step

【Zコード】

N8469A

【作者名】

友

【あらすじ】

初瀬美華高校2年、名前が女みてえという以外別に悩みもなく過ごしてきたが、……いきなりの引っ越し、行った先はメチャクチャくたびれてるし、しかも初日から変な女に会つし……全く、神様は一体俺にどんな恨みがあんだったの？

第一節

時が止まつたよつた鎧色の町は、夕暮れが似合ひてしうがないね。セピア調の画面演出でもすりやハリウッド顔負けだぜ、あつと。

「ハア…なにが悲しくてこんな街に引っ越さなきゃならんのだ? 全く。」初瀬美華(17)学生。今まで名前が女みたいといつて1点を除き別に悩みもなく暮らしていた俺にこんな災難が待ち受けているなぞ誰が想像しようか?

といふか無理があるだろ? 高2で引っ越しつてどう? 年頃じゃん。彼女とかどうすんの? いなけれど。

まあ、こりこり時はあれだな、現実逃避。引きこもりだ!

「…ハア…それはやだな、やつぱし。」

つーかなんで引っ越すことになつたのかとこりと…。

一週間前美華宅夕食中

「そりいえば父さん昇進が決まつてな、来週から本社に行くことになつたんだ。」

「へえ、そりやよかつた。」

「だから来週までに荷物をまとめとくよつて。」

「ああ。…つてちょい待てやー。」

「どうした?」

「んで俺が荷物をまとめんといかん? 一人でいきやいいだろ? なんならお袋も連れてつていいよ。」

「それだとおまえが生活できないだろ? おまえの世話をしてくれるのは娘さんがいれば話は別だが…。」

「ぐつ……。」

「とこりとで来週までに荷物をまとめておくれよつて。」

で、今に至る。

「……ハア、溜息オブザイヤーとかいう部門作ってくんねえかな。

まあ絶対作ってくんないだろ?」がな。

「……帰ろついでに二点リーダーオブザイヤーも欲しいな。

」

「つーかあれだよな、なんこともつとはやく言えっての、マジありえ痛てつ！んだオイッ！つて紙飛行機？俺様に攻撃するなんざいい度胸じやねえか。」

独り言を連発しながら空を見上げる、お巡りさんがいたら間違いなく職務質問だなとかいうコメントは受け付けません。

俺の頭上には塔？らしきものがそびえ立っている、全長は10メートルを超えるだろう。その隅の方に何かがはためいている。ちなみに俺の視力は2・0、はためいているものがスカートだとうことを確認することにさして時間はからなかつた。

えーっと、色は…じゃなくて、自殺？この紙飛行機は遺書ですか？待て待て待て。

どうして俺はこう不幸なんだ？神様は俺に恨みでもあんのか？まあんなことは置いといで……。

「はやまんなーーー生きていりゃーーーことあるからーーー」

ありつたけの大声を出したつもりだが、彼女は聞こえてないようではまだ紙飛行機を投げている。

「敷島爆撃特攻隊、青木三等空兵、突艦いたしますーーー」

とでも副音声を入れたいくらいの飛びつぶりだ。

現実逃避はこのくらいにしてどうすればいいのか考えよう。シンプルに塔に登つて止めるか？いや、登るまでに飛び降りたらアウトだ。下手すりや加害者にされる。どうする？もう塔の前の広場

は紙飛行機で埋め尽くされてる……そつだ！その手があつた。おれつて頭いい！

靴で地面に文字を書く、はやまるな……じゃだめだ、入りきりん。ここはシンプルに……。

「はやまるなー！」

デカデカと書かれた死ぬなどいう字をバックにもう一度叫ぶ。

今度は気づいたらしくこっちを向いた。が、俺の目は彼女が首を傾げたのを見逃さなかつた。

「くつそ、バカ女が。今日はぜってえ厄日だ。」

愚痴をこぼしつつ地面を蹴る。一いつなつたら首根っこひつつかんで引きずり降ろすしかない。

階段を一段とばしで駆けあがる、無駄に段数が多い。

「ゼエゼエ、制作者誰だ？こつちは急いでんだよ、もつと登りやすくしりや。」

足を酷使し何とか一番上まで登りきつた頃には汗まみれだつた。息も絶え絶え正面の扉を開ける。

「こんばんは。」

女の子が笑つてた。肩まで掛かる黒い髪にセーラー服が映えてイカすぜ（死語）。

「ああ、こんばんは……じゃなくて。はやまんなー生きてりやいいことあるから、俺も最近やなこと続きだけどさあ、真面目に。だから死のうとか思うなつての。」

必死で説得する、多分ここまで必死になつたのは学校の文化祭で女装をするという企画を拒否したとき以来だ。

しかし俺の説得は彼女に全く通じなかつたらしく、首を傾げてしばらくした後あまつさえ笑いだした。

なんですかこの人？危ない人ですか？電波受信しちやつた人ですか？俺の中で疑問符スパイラルが発生し、エマージェンシーゴールが幾度も繰り返される。

「クスクス、ごめんなさい。そう見えちゃいましたか？」

そろそろ頭の中で第三次世界大戦勃発といふこと、彼女が驚きの新事実を口にし始めた。どうやら自殺といふのは俺の誤解で、彼女はどうやら紙飛行機を投げるためにここに登つただけで、俺の努力はすべて無意味で、やっぱ彼女は危ない人だといふことが分かった。

ハハハ、これだから人生っておもしろいよね。

「……じゃあ俺帰るんで、お騒がせしてすんません、それでは」ゆつくり。

「さようなら、また会えるといいですね。」

別れ際の彼女の笑顔はかなり綺麗だった。もつ一度と会いたくは無いがな。

第一節

不幸な」とと幸せな」とは、最終的には5分5分の割合にならし
い。

といつ」とは俺にもそろそろ幸せなときが来てもいいだろ？

今日は登校初日だつてのに犬には吠えられるわチャリはパンクする
わ道には迷うわ散々だつた。ましてや最後にこれだろ？ハハハ、笑
つちまうぜ。

……どうして俺の隣の席にいっつがいるんだ？

「……ハア。」

「溜息なんてついて元気無いですね？」

「いや、別に（てめえのせいだよ）。」

「あつ、ちなみに私初瀬美久つていいます。よろしくー。」

「ああ、よろしく。……つてちょっと待て、それって本名？」

「はい、一字違いですね。」

「ハハハ、一字違いだな、奇遇だな、全く。」

同姓同名じやなかつたことを感謝しておいつ。

「そういえば美華君、教科書持つてますか？」

「ああ、一応。」

鞄から教科書を出す。……出す……？

「あれ？確かに入れたはずなんだけど……。」

あきらめず鞄を漁つていると、入れた覚えのない紙が出てきた。

「転校初日は教科書を忘れるものだ。父より」

「……ハハハ……ぜつてえ殺す。」

まああれだ、王道だよな、確かに。これで消しゴム落としたり
して、拾おうとしたら指が触れちゃつたりして、お互い
「じじ、ごめん」

とか言つちやつてさ、そこからラブストーリーが……つていつの時
代だボケが一ナメンのも大概にしろやー。

「……ハア。」

全く、溜息をつくと1つ年をとるとか言つたが、だとしたら俺はぶつちぎりでギネスにのれるぜ。

「よく溜息つきますねえ、溜息オブザイヤーもりえますよ~。」

「いらねえよ、そんなもん。」

いや、この前は欲しかったけどさ。

ちなみに今は国語の授業中で、教卓では白髪のおっさんが訳の分からん文を大げさな言葉遣いで寛大に読み上げていた。

何でそんなとこにアクセントをつける?そこは巻き舌で発音する決まりでもあるのか?国語教師に心の中でツツツミミを入れ続ける。つかせつてえ独身だな、コイツ……。

「あの入つて絶対独身ですよね?」

すぐ横から初瀬美久（17）電波系が言つた。どうやらコマイツと俺の思考回路には同じ部品が多数組み込まれているらしい。

「ああ、多分独身だろうな。まあそれはいい。問題は別にある。」

「ああ、やっぱあそこは銀河鉄道の夜じやなくて蜜柑ですよねー。」

「ちがう、俺は機械の体に興味はないし、今は夏だ。ハウス栽培はお断りだ。」

「……じゃあなんですか?問題つて。」

「顔が近い、もう少し離れてくれ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8469a/>

step

2010年12月12日13時17分発行